すべての人に開かれている図書館

シャンティ Shanti

2013年4月
はる
269

『シャンティ』通巻269号　2013年4月1日発行（1・4・7・11月の1日発行）
1985年6月28日第三種郵便物承認

公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会

わたしたちは2011年秋から、宮城県山元町と福島県南相馬市の仮設住宅を移動図書館車で回っています。

「カレンダーにマルをつけて、図書館車が来る日は出かけないようにしてるの」と喜んでくださる方がいるなか、「私は仮設住宅に住んでいないから、ここさ来にくいの。仮設に住んでいなくても本借りていいって言われたけど、仮設の人とは顔あわせにくい」とおっしゃる方もいる。復興支援、従来の地域福祉の枠組みから外れた方には支援が届きにくいという、見えない溝ができている現状を肌で感じます。

東日本大震災から2年が経ちましたが、日本のどこでも大地震が起きてもおかしくはない状況だと言われています。これまでの経験を共有し、未来へ向けてともに備えることが大切ではないでしょうか。どんなときでも図書館は扉を開いて待っています。いまもう一度、本との出会いを。

Index

シャンティ 269号 目次

4 **定点観測：アジアから**
カンボジア／ラオス／ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ／アフガニスタン／岩手／気仙沼／山元／東京

12 特集 **すべての人に開かれている図書館**
ユネスコ「公共図書館宣言」を読んでみよう
「すべての人に開かれるように」わたしたちの図書館活動
インタビュー ミャンマー（ビルマ）難民キャンプの図書館
ユースボランティア／クメール作家協会
対談 子どもと本と図書館と 佐藤涼子×市川斉

24 **世界の絵本を読んでみよう**
創作絵本「四ひきのともだち」
ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ

26 **シャンティな人たち**
小西純寛（千手観音店主）

28 **スタッフの昼ごはん** カンボジア
29 **SVA・国内外の活動**
30 **日本しゃんてぃな旅** 埼玉・能仁寺
31 **おしらせ／編集後記**
32 **道** 子どもと本と図書館 佐藤涼子

お茶を飲みながら、本をめくりながら、
住民と言葉をかわす移動図書館活動のひととき（福島県南相馬市）

共感できる物語にイラストを描けるのが嬉しい

カンボジア **Cambodia**

報告：江口秀樹（カンボジア事務所）

創作紙芝居『悲しいごはん』は、農家に大切に育てられ、人間に食べられることを夢見ていたお米が、食べものを粗末にする子どもにその夢を壊される悲しみを描いた作品です。イラストレーターのソム・サラットさんにイラストを描くときに留意したことを伺いました。

「カンボジア人にとってお米は重要な食べ物なので、子どもがお米の大切さを感じるように、こぼされて食べられなかったお米たちの辛い気持ちが伝わるよう表情に気を配り工夫しました。また、農家が汗水たらして一生懸命お米を育てていることも織り込みました。

SVAの研修会で、子どもの視点に立って、シンプルでわかりやすいイラストを描くことがいかに大事かということを学びました。SVAは昔話であれ創作であれ、子どもの成長にとって本当にいいお話をつくろう、という意気込みが強く感じられますね」サラットさんは2004年からこれまでに4作品のイラストを手がけています。

たくさんの子どもに来てほしい

ラオス **Laos**

報告：伊藤解子（ラオス事務所）

2007年にSVAに入職した学校教育支援事業担当のオイ職員（左から2人目）。当初はひとつひとつ仕事の手ほどきを受けていた彼女も、現在では教育行政官との公的な手続き、地方の小学校教員や保護者とのやり取り、事業のモニタリングで建築エンジニアとの建設の細かいチェックなど、事業を背負って立つ職員です。

世界遺産の町ルアンパバーンの中心地から、車で3時間半。見渡す限り山が連なるヴィエンカム郡。以前の対象地南部サラワン県からは1000キロ以上も離れ、地理的・文化的な背景が異なり、住民の85%はカム族などの少数民族、ラオスの143郡中13番目に貧しいこの郡で今年校舎建設を開始しました。

「カム族の村は初めて。でもとても興味深い」いつも向上心があふれ、共に活動する人たちと人懐っこく会話を操る彼女に、地方の関係者の顔もほころびます。子どもの前で、読みきかせも始めました。私たちの事業はこうしたスタッフの人柄に大きく支えられています。

陸前高田市の市立図書館が貸出を再開しました

岩手 **Japan**

報告：古賀東彦（岩手事務所）

2012年12月、岩手事務所の活動地のひとつ陸前高田市で、「仮」ながら市立図書館が貸し出し業務を再開しました。木の香りが心地よいです。「入り口は小さいけれど、ようやく市民のみなさんに応えられます」副主幹として図書館の再興に当たる長谷川敬子さんもうれしそう。

震災により、陸前高田市立図書館は職員全員を失い、建物も壊滅という大きな被害を受けました。「マイナスからの出発だった」と長谷川さん。大変な苦労があったと思います。それでもまだ通過点、数年後には本設図書館の工事が控えています。「本設の図書館は、この陸前高田市と一緒に新しく生まれ変わり、前向きで夢がふくらむ場にならなければ」と。

いま市内には、岩手事務所が運営する陸前高田コミュニティー図書室をはじめ、3つの民設民営図書室があります。「本設の図書館ができたあとも、みなさんの経験や知識を生かせるよう、連携を図っていきたいですね」と長谷川さん。共に進みましょう。

南相馬でできることを一緒に

報告：古賀東彦（山元事務所）

山元 **Japan**

「こういう車が止まっていたら、子どもたちは駆け寄って本を見に行くだろうなあ」

山元事務所の移動図書館車の写真を見ながら、近藤能之さんは笑顔に。近藤さんは、福島県南相馬市原町区にあるよつば保育園の副園長です。

「地震、津波、放射能、そして風評被害。南相馬はとても大変な街」と近藤さん。その南相馬で私たちにできることはあるのか、南相馬で生活し、活動している方に話を聞きたいと、近藤さんを訪ねました。

よつば保育園は福島第一原発から25キロの距離にあります。近藤さんは、子育てをする親たちの不安を少しでも取り除こうと、いち早く職員や保護者、ボランティアとともに、自ら園内の除染に臨みました。いまは、園児の家の除染にも取り組んでいます。

「安心感をひとつずつ積み上げることが大切」と近藤さん。「南相馬は震災をきっかけに新しく生まれ変わる。いろいろな人が南相馬にかかわってほしい」とも。私たちも一緒に走りたいです。

生まれ故郷を何とかしたい

気仙沼 **Japan**

報告：里見容（気仙沼事務所）

2012年12月から、気仙沼市大谷地区で若い世代が中心になって、まちづくり勉強会を開いています。佐藤健さんは35歳、その運営メンバーのひとり。佐藤さんは自宅を津波で流され、一時は大谷を離れたものの、集団移転にあたり戻ってくることを決めました。

「思い出が詰まった大谷地区が震災により被害を受けた。以前の姿を取り戻すために少しでも何かできないかと思った」と話します。

勉強会に参加したことで「まちづくりはすべての世代が考え行動に起こすことで良いものにできるものだということ。より多くの声と力が必要で、他人任せではいけない。自分と同世代がこの町に対して真剣に考えている。大谷の未来はまだまだ明るい」と思ったそうです。

まちづくり勉強会では、大谷海岸の利用法や災害復興住宅の視察など、意欲的に取り組んでいます。住民一人ひとりが参加することが地域の将来につながっていくのだと思います。

多くの人にクラフト・エイドを知ってもらうために

報告：藤川和美（東京事務所）

東京 **Japan**

2月のある朝、クラフト・エイドは若い女性に人気の雑誌「Mart（マート）」（光文社）の取材を受けました。テーマは「あなたが使うサブバッグ」。国内事業課のスタッフ3人が、クラフト・エイド商品のランチバッグや、4月から発売するトートバッグを紹介しました。今回のようにファッション誌に商品を取り上げてもらう機会は滅多にありません。新商品のブラウスやワンピースを着て撮影に臨みました。

そして午後は、4月発行の2013年度版カタログ製作のため、モデルと打ち合わせです。今年は「絵本を届ける運動」のボランティアさんにお願いしました。この時期の事務所では、新商品の服やバッグをとっかえひっかえする光景が見られます。

NGOは宣伝広告にお金をかけない分、人や企業のご協力が不可欠です。アジアの生産者が心をこめて作った商品を、一人でも多くの人に知ってもらいたい。今年のカタログにも多くの方のご協力が詰まっています。写真は、カンボジアのパートナー団体「ビッレジワークス」の生産者たち

特集

すべての人に開かれている図書館

日本の図書館での講演で、イギリスの図書館員コルウェルさんは「本は広い世界をのぞく窓。選んだ豊かな蔵書があり、子どもたちがいつでもすきなときにいってぶらぶらすることのできる図書館が地域にあるということが、貴重で大切なのです」と語っています。わたしたちの図書館も、苦境にたつ人がいつでも本に触れることができるような開かれた場所であるように、努めてきました。ユネスコの「公共図書館宣言」につながる精神です。

{公共図書館の使命}

住民のために公共図書館がおこなう情報、識字、教育および文化のサービスのうち、核となるもの12項目です。（ユネスコ「公共図書館宣言」より）

1. 幼い時期から子どもたちの読書習慣を育成し、それを強化する。
2. あらゆる段階での正規の教育とともに、個人的および自主的な教育を支援する。
3. 個人の創造的な発展のための機会を提供する。
4. 青少年の想像力と創造性に刺激を与える。
5. 文化遺産の認識、芸術、科学的な業績や革新についての理解を促進する。
6. あらゆる公演芸術の文化的表現に接しうるようにする。
7. 異文化間の交流を助長し、多様な文化が存立できるようにする。
8. 口述による伝承を援助する。
9. 市民がいかなる種類の地域情報をも入手できるようにする。
10. 地域の企業、協会および利益団体に対して適切な情報サービスを行う。
11. 容易に情報を検索し、コンピューターを駆使できるような技能の発達を促す。
12. あらゆる年齢層の人々のための識字活動とその計画を援助し、かつ、それに参加し、必要があれば、こうした活動を発足させる。

「すべての人に開かれるように」わたしたちの図書館活動

ユネスコが1994年に採択した「公共図書館宣言」では、図書館は利用者が知識と情報を手に入れられる拠点であること、そのサービスは人種や性別、宗教などを問わず、すべての人が平等に利用できるべきであると、語っています。

公共図書館のありかた

公共図書館は、その利用者があらゆる種類の知識と情報をたやすく入手できるようにする、地域の情報センターである。

公共図書館のサービスは、年齢、人種、性別、宗教、国籍、言語、あるいは社会的身分を問わず、すべての人が平等に利用できるという原則に基づいて提供される。理由は何であれ、通常のサービスや資料の利用ができない人々、たとえば言語上の少数グループ（マイノリティ）、障害者、あるいは入院患者や受刑者に 対しては、特別なサービスと資料が提供されなければならない。

いかなる年齢層の人々もその要求に応じた資料を見つけ出せなければならない。蔵書とサービスには、伝統的な資料とともに、あらゆる種類の適切なメディアと現代技術が含まれていなければならない。質の高い、地域の要求や状況に対応できるものであることが基本的要件である。資料には、人間の努力と想像の記憶とともに、現今の傾向や社会の進展が反映されていなければならない。

蔵書およびサービスは、いかなる種類の思想的、政治的、あるいは宗教的な検閲にも、また商業的な圧力にも屈してはならない。（ユネスコ「公共図書館宣言」）

ユネスコ公共図書館宣言
UNESCO Public Library Manifesto

社会と個人の自由、繁栄および発展は人間にとっての基本的価値である。このことは、十分に情報を得ている市民が、その民主的権利を行使し、社会において積極的な役割を果たす能力によって、はじめて達成される。建設的に参加して民主主義を発展させることは、十分な教育が受けられ、知識、思想、文化および情報に自由かつ無制限に接し得ることにかかっている。

地域において知識を得る窓口である公共図書館は、個人および社会集団の生涯学習、独自の意思決定および文化的発展のための基本的条件を提供する。

この宣言は、公共図書館が教育、文化、情報の活力であり、男女の心の中に平和と精神的な幸福を育成するための必須の機関である、というユネスコの信念を表明するものである。

したがって、ユネスコは国および地方の政府が公共図書館の発展を支援し、かつ積極的に関与することを奨励する。

（1994年11月採択）

わたしたちが図書館を通して本を提供してきたのは、大震災の被災者、難民たちなど、故郷を追われた人びとでした。将来はどうなるのか、生活はどうしたらいいのか……不安を抱えた人びとに、本は必要なものだということをスタッフは経験の中から学び、ふさわしい本を選び、棚に並べてきました。

「図書館が、本の読めない人には縁のない場所だと思って欲しくない。図書館はすべての人に開かれていると知って欲しい」と考えていたSVAのスタッフは、「公共図書館宣言」を知ると、現地の言葉に訳して図書館に貼りだし、図書館員にその意義を伝えました。利用者に浸透していくにつれ、「本なんか読まなくてもいい」と言われてきた人びとと、言ってきた人びとの考えは少しずつ変わっていきました。

古代エジプトの図書館の入口には「魂の診療所」という文字が彫ってあったそうです。「本を読むとほっとしてよく眠れる」アフガニスタンの子どもが言ったのと、同じことばを遠く離れた東北の被災地でも聞きました。人の心を癒し寄りそうところに、「SVAの移動図書館活動に、図書館の原点を見た」といわれるのでしょうか。

ユネスコの「公共図書館宣言」には、公共図書館が果たすべき活動が「使命」としてあげられています。経験から導き出したSVAの活動が、ユネスコが語る使命にかなっているのはもっともなことかもしれません。公共図書館宣言の精神はどんな形でSVAの活動に結実しているのか、使命と活動を対応して見てみましょう。

「公共図書館の使命」と各国の活動

子ども図書館

AFGHANISTAN 1

幼い時期から子どもたちの読書習慣を育成し、それを強化する。

ナンガハル州ジャララバード市の「子ども図書館」で、読み聞かせや本の貸し出し、お絵かき、裁縫教室などの図書・文化活動、不就学児童のための特別教室を行っている。治安が不安定なアフガニスタンでは、安心して遊べる場所は少なく、子どもらしくほっと過ごせる場所になっている。2011年は年間6万1000人が利用、50%は女子。

2 LAOS

公共図書館の小学校へのアウトリーチ活動

あらゆる段階での正規の教育とともに、個人的および自主的な教育を支援する。

図書室が無く公共図書館からも離れている小学校が多いため、公共図書館が車・バイク・ボートなどで本を運んで小学校を巡回し、子どもたちにおはなしの世界を届けるアウトリーチ活動を行っている。図書館員が教員に読み聞かせの指導をしたり、図書館が読書活動を助けるなど、図書館を管轄する情報文化省（局）と学校教育を統括する教育省（局）が連携して、公教育とノンフォーマル（学校外）教育の両面で子どもたちの読書推進活動を支えている。

3

個人の創造的な発展のための機会を提供する。

青少年の創造性を引き出すために出版する創作絵本の作品を募集している。キャンプ出版委員会とともにテーマを設定し、コミュニティ図書館や学校へ応募要項を掲示。選ばれたストーリーを発表してつける絵を募集。受賞作を出版し、図書館で活用している。「平和」や「共存」などテーマ選定にも工夫している。24ページに2008年絵本コンテスト優勝作品「四ひきのともだち」を掲載。

4 IWATE

地元資料のアーカイブ化

市民がいかなる種類の地域情報をも入手できるようにする。

岩手県沿岸部の被災地の仮設住宅を移動図書館車で巡回し、住民へ読書の機会を提供するとともに、震災前の町の記録となる写真をデジタル化してタブレットで閲覧できるようにしたり、山田町の住民有志らでつくる伝津館・山田町大震災記念誌編集委員会が作成している震災時や復興の様子を収めた写真集「あの日から明日に向かって／大震災／山田の記録」の編集のお手伝いをしている。

5 BRC

図書館ユースボランティア

青少年の想像力と創造性に刺激を与える。

ともに活動する
サイ・サイ・ポーくん
バンドンヤン難民キャンプ／20歳

ともに活動する
シャー・ロー・ムーさん
メラマルアン難民キャンプ／20歳

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプには、図書館活動や文化活動を支える図書館青年ボランティア（TYV：Toshokan Youth Volunteer）がいる。TYVは2006年に組織され、7ヵ所の難民キャンプ合計で、約150人の10代半ば～20代前半の若者が活躍している。

普段は、職業訓練学校で機械工作を学んでいます。楽しいのは、子どもたちと触れあうときです。人形劇公演では、どうしたら子どもたちが喜ぶのか、おはなしの意図が伝わるのか、いつも考えています。人形劇を見た子どもの大きな笑い声が聞こえてきた時は、すごく嬉しくなります。また、自分が参加している活動を通して、子どもたちが読書習慣を身につけていくことをとても誇りに感じています。

TYVの活動を通して、自分はコミュニティの子どものために働くことが好きなのだと感じました。将来は、コンピューターの先生になって、キャンプの子どもに多くのことを教えていきたいと思っています。

TYVになって2年です。図書館員のお手伝いや、図書館でのイベントの開催などの中で、人とコミュニケーションを取ることの面白さを感じています。もともとおしゃべりな方ではないのですが、SVAの研修で読み聞かせやゲームの技術を身につけて、自信が出てきました。上手に誠実にコミュニケーションをとる図書館員を見て、私もいつか彼女たちのようになりたいと思うようになりました。私の将来の夢は、みんなが気さくに話しかけてくれるような図書館員になることです。

（聞き手：菊池礼乃／BRC事務所）

口述による伝承を援助する 6

CAMBODIA

民話絵本出版

ともに活動する
カウ・ナロムさん
クメール作家協会

カンボジアをはじめ各国で民話を聞き取り集め、絵本にして図書館へおき、次世代の子どもたちが親しめるようにしている。その絵本の制作には、それぞれの国で地元の作家と協力し、出版文化の振興を助けている。

ポル・ポト時代、自分の考えや意見を口にすることは許されませんでした。ポル・ポト兵にほとんどの書物や文書を焼かれましたが、それでもなお、伝承だけは心の中で生き続けました。夜、親が子にお話を伝えて、営みの中に存在し続け、人々の生活の中にクメール（カンボジア）文化が受け継がれてきました。

口述伝承は、物事の善悪など子どもが社会で暮らしていくために必要なことを教えたり、貧しさにくじけないよう励ますのに役立ちます。また、あるものは純粋に聞き手を楽しませます。人々が代々語り継いできた伝承のお話は、ずっと記憶に残していきたいという証です。年齢や国境を越えて人々を魅了する力を持っています。（聞き手：チャイ・ポリー／カンボジア事務所）

異文化間の交流を助長し、多様な文化が存立できるようにする。

難民キャンプの中で暮らしている子どもたちが自分たちの民族の伝統衣装を着て、伝統的な舞踊や歌を披露するイベントが年1回行われている。

自発的に伝統舞踊や歌を練習する過程で、自分たちのアイデンティティを認識し、異なる文化に触れて、お互いの文化を尊重することを学ぶ。昼のレクリエーション活動で他民族同士の交流が深まる。

7 難民子ども文化祭 BRC

対談❖

子どもと本と図書館と

長く公共図書館で活躍、子どもと読書の活動を行ってきた佐藤涼子さん。今も読書指導の実践や研修を続けておられ、SVAが東北で移動図書館活動を行う際にも、アドバイスをいただきました。佐藤さんの長い経験から導かれた本と読書、図書館についての知見をお話しいただきました。

佐藤涼子（さとう・りょうこ）
SVA専門アドバイザー。「子どもと読書のコーディネーター&ストーリーテラー」として様々な読書活動を実践。明治大学等兼任講師。

市川斉（いちかわ・ひとし）
SVA事務局次長（経理・総務課長兼務）。1990年SVA入職。神戸事務所長、アフガニスタン事務所長などの現場経験を経て現職。

佐藤涼子さんと図書館、SVA

市川　佐藤さんが図書館員になられたのは、1970年ころ。日本の図書館はどんな状況だったのでしょうか？

佐藤　石井桃子さんの『子どもの図書館』★に影響され、文庫を始めた人も多かったですね。いろいろ貧しかったけれど、文庫も図書館も志を持って勉強していました。子どもは未来という思いも同じでした。当時、公共図書館は乳幼児やヤングアダルト★へのサービスも確立しようとしていて、理論と実践が整い始めた、課題は多いけれど勢いのある時代でした。シャンティ国際ボランティア会（以下SVA）の海外の図書館に行くと、そのころのことを思い出します。

市川　当時は地域文庫が全国各地で設立されて、いろいろな取り組みがされていましたよね。

佐藤　最盛期、文庫は全国に4500を超え、全ての子どもたちへ本を手渡す地域の読書・文化運動として広がり、図書館や本屋の無い地域でも、子どもたちは本に親しむことができました。文庫は、日本の読書活動の歴史の中で特筆されるべきものです。文庫による運動がなけ

★『子どもの図書館』
1965年岩波新書から出版され、自宅を開放した「かつら文庫」での実践を記録して話題を呼んだ。1999年に岩波書店から刊行された『石井桃子集5』に増補された『新版子どもの図書館』が収められている。

★ヤングアダルト
「若い大人」という意味で、第二次世界大戦後、アメリカの図書館界で十代半ばから後半の年代をさす言葉として使われだした。

れば、日本の公共図書館はもっと設置や活動が遅れたことでしょう。

市川　佐藤さんと初めての出会いは、1993年。当時、品川区で地区図書館の館長をされていたと記憶しています。

佐藤　1994年、図書館員を中心に13人でラオスを訪問して、市川さんにはそのときアテンドしてもらって以来のご縁ですね。日本人がアジアの他国で、どんな図書館活動支援をしているのか、興味がありました。ラオス事務所で1週間ほど現地の図書館員と研修会を行いました。その後、ラオスには3回ほど行き、教員への読書研修の講師や、コンドゥアン先生★などラオスの図書館関係者と一緒の研修会も行いました。その10年ほどの間に、ラオスでは図書館協会が作られるまでになりました。カンボジアでも研修して、アフガニスタンでは絵本作家のやべみつのり先生★と一緒に絵本と紙芝居の研修を行いました。

アフガニスタンの先生たち

市川　私が初めて海外に赴任したのは、アフガニスタンでした。9・11後、米英軍の空爆による大量難民流出の危惧から、緊急救援事業を実施。2003年に事業を開始しましたが、図書館活動が本当に受け入れてもらえるか、心配でした。例えば、東南アジアの実践について、ビデオで紹介、研修しても、「そんなことはできない」の一点張り。しかし、そのうち職員が自信をもって、読み聞かせをするようになりました。2年ほど経つと、恥ずかしそうにしながらも、先生たちが読み聞かせを始めるようになったんですよ。

佐藤　教え込むのが主であった教育が、図書館活動で変わってきたと言えますね。

市川　赴任当初は子どもを静かにさせるために先生が棒で叩くところもみました。しかし、移動図書箱の学校への巡回活動で、子どもたちが集中して読み聞かせを聞いているのを目の当たりにして、先生の意識が変わったのではと思います。

識字、人権、そして読書

市川　私が入職した1990年、国際識字年にSVAは神奈川県で識字問題に取り組みました。実際に非識字者と会って知ったのですが、読めるか読めないかという問題をこえて、文字を知らないということは「日陰者として生きること」を強いられるのですね。寿町★の識字教室で、学習者が文字を獲得しようとする気迫に圧倒されました。文章としては稚拙に思えても、それは、失ったものを取り戻すかのように、研ぎ澄まされた言葉でした。一方、自分が文字を知っていても、心から文字で書き表せていないのでは、恥ずかしく感じました。

佐藤　「ことば」で、人は自分を見つめ発信し、自分や他者の考えを知り、他者ひいては世の中とつながることができる。歴史の一員となれるということでしょうか。

市川　字が読めることと、本の内容が読み取れることが別のことだというのも興味深いです。

佐藤　識字は人間になる原点。読書は「静かな営み」のような気がします。本から得た驚きや感動を反芻しながら、個々の心が広がり深まっていく。その静かな時間が減っているようにも思います。識字と読書と教育の関わりをもっと追求していきたいですね。

市川　このごろ、識字と本、図書館との関わりについて、改めて考え、識字の本を読み直しています。昔、「SVAとはなにか」、活動の原点をしょっちゅう有馬さん★から聞いたものですが、自分も若い人に伝える年齢になったと感じています。

佐藤　それはNGO職員として素敵な課題です。自分の立ち位置を見つめ直すのは大切なことですね。次の世代にどうぞ、活動の原点や原則を発信していってください。

お互いに学びあえる

佐藤　私はアフガニスタンに研修に行かせてもらい、本当に良い経験ができました。アジア的な文化や価値観、キリスト教的なものに加え、イスラムの文化に触れることで、世界を丸く理解できることを実感しました。

市川　実はアフガニスタンでの勤務終了直前に体調を崩し、任期を3週間早めて緊急帰国、入院生活は2カ月に及びました。長期入院は、病気の大変さより、精神的に人間としてのプライド、自信を無くしていきます。本当に、心が折れそうになった。まだ、子どもが小学生だったので、もし、このままだったら、どうやって生活していけるのか、本当に苦しみました。

そんな時、入院先の大学病院には、ボランティアが運営する図書室がありました。週2回だけ、1時間しか開館しないのですが、その時は、図書室に行くことが唯一の楽しみでした。折れかかった心を本に支えてもらったと思います。

★コンドゥアン先生
ラオス図書館協会会長。元ラオス国立国会図書館長。ラオスの図書館の発展に尽くしてきた第一人者。『シャンティ』2013年冬号19ページにインタビューを掲載。

★やべみつのり先生
1977年より子どものための造形教室「はらっぱ」を16年間主宰。現在は、各地で、造形遊びや紙芝居作りのワークショップを開いている。絵本に『かばさん』（こぐま社）『あかいろくんとびだす』（童心社）など。

★寿町
横浜市中区寿町を中心とした寿地区は、日雇労働者が暮らす「ドヤ」とよばれる簡易宿泊所が100軒以上あり、高度成長期には港湾労働者が多く寝泊まりした。現在は労働者や生活保護を受ける人びと約6300人が暮らす。

★有馬さん
有馬実成。原江寺（山口県）前住職。1979年、曹洞宗調査団に入りカンボジア難民キャンプを視察。SVA立ち上げの中心的役割を担い、曹洞宗国際ボランティア会初代事務局長。その後、改組した社団法人シャンティ国際ボランティア会初代専務理事。2000年逝化。

そして、東日本大震災では、気仙沼での緊急救援に関わった後、広報課長の鎌倉と岩手に派遣されました。6人が死亡もしくは行方不明となり、津波に襲われた陸前高田市の図書館を前に、「移動図書館であれば、多くの人に寄り添って、応援できる」と確信しました。それは、アフガニスタン、自分の入院体験を元に実感したことでした。

佐藤 岩手県の被災地で、軽トラの荷台に本棚を積んだ手作りの移動図書館車★で始めたこと、「なにもないところから作り出す」NGOのやり方が、日本の図書館関係者にインパクトを与えました。

市川 海外でつちかったノウハウが国内で活きた事例だと思います。今では、岩手、宮城、福島において、移動図書館活動を展開しており、多くの方に本を通して、寄り添っていますし、これからもそうしたいです。

佐藤 SVAの活動から、日本の公共図書館や読書活動関係者は、図書館活動の原点を見いだすことができるし、活動地から見ると、日本の活動は更なる発展のための指針ともなるでしょう。お互いの活動は、いわば合わせ鏡のような存在といえるかも。また、SVAは東南アジアとアフガンを通して、世界の文化を広く理解できるようになった。その2つの視点を持てることに自信を持ってよいと思います。SVAに関わって、私も広い視野で図書館活動を見られる幸せを得ました。この経験を活かし、「SVAにしかできないこと」を見すえ、取り組んでいって欲しいですね。

★手作りの移動図書館車
2011年7月「いわてを走る移動図書館プロジェクト」開始から12月まで使われた。小さい車体で遠野から沿岸部の仮設住宅まで悪路を走り続け、利用者や関係者に親しまれた。本式の移動図書館車の導入とともに役目を終え、現在はSVA気仙沼事務所で使われている。

対談を終えて——

「絵本で文字の読み方、物語の楽しさを知ったら、次はヤングアダルトが読める本が必要になります。大人への成長の過程で、文学や専門書を読む力を養う大切な時期にふさわしい本があるのです」という佐藤さんからの提言が印象的でした。読書経験を積み重ねていく大切さを社会にもっと伝えたいと感じました。
（清野陽子）

子どもの図書館

石井桃子（岩波書店）／欧米のすぐれた公共図書館の児童室を視察した石井桃子さんが自宅を開放して、1958年に「かつら文庫」を開きました。通う子どもたちのいきいきとした様子を描き、子どもに本をと願う多くの人びとに影響を与えたすぐれた古典です。絶版になっていますが、図書館で見つけられたらご一読を。

えほんのせかい こどものせかい

松岡享子（日本エディタースクール出版部）／児童図書館の先駆者のひとり、松岡享子さんが幼い子どもを持つ母親に向けて書いた「子どもを本の世界へ招き入れる」入門書。絵本のよしあしを見わけるためにすること、読んでやる際に気をつけることなど、語りかけるように説いています。

子どもと 本の世界に生きて ——児童図書館員のあゆんだ道

アイリーン・コルウェル（こぐま社）／イギリスの児童図書館員の草分けであり、お話の名手であるコルウェルさんの自伝。巻末に1976年の講演録「子どもと本」が収められ、「本の価値と役割」、「子どもに読書をすすめるために」とわかりやすく書かれています。

BOOK GUIDE もっと図書館の魅力を知るための6冊

希望への扉リロダ

渡辺有理子（アリス館）／故郷を追われてたどり着いたタイの難民キャンプ。少女はリロダ（図書館）で本の楽しさと出会い、図書館員として成長しながら民族の誇りと未来への希望を取り戻していくノンフィクション。小学校高学年から対象。

図書館は、国境をこえる

シャンティ国際ボランティア会編（教育史料出版会）／SVAの図書館活動30年の歩みをまとめました。カンボジア難民キャンプからアフガニスタンでの図書館活動まで、活動に参加したスタッフが、自らの体験を元につづった実践の記録。

図書館の主

藤野ウミハル（芳文社）／児童図書館には口の悪い図書館司書が…スチーブンソンの「宝島」を読むことで、つまらないいじめをやめて、本を通じていじめていた相手と友達になるなど、児童書の魅力を描いた大人のためのコミックス。4巻まで刊行。

世界の絵本を読んでみよう❷

創作絵本

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ
絵本コンテスト優勝作品

四ひきのともだち

1

おおきな森に、九官鳥、カラス、カメ、ライオンがいました。四ひきはともだちでした。

2

ある日、森に二人の狩人がやってきました。九官鳥のつがいは、かわいいひなが見つからないよう、じっといきをひそめていました。

3

ところが夜になって、狩人がたき火をおこすと、そのけむりで、ひなたちがなきだしました。「鳥がいるぞ、つかまえよう」狩人は木にのぼろうとしました。

4

木にのぼらせまいとカラスが羽をバタバタさせて狩人にぶつかりました。しかし、あんまり羽を動かしたので、つかれてしまいました。

5

カメはたき火を消そうとしました。「おおきなカメだ。こいつをかわりにつかまえよう」カメは川にひきずりこもうとしましたが、狩人はめげずにはい上がってきます。

6

九官鳥がライオンを呼びました。ライオンはおそろしい声でほえかかりました。狩人はにげだして、もう二度と森にはきませんでした。助けあい人間に勝った森の動物たちは、いつまでもしあわせにくらしました。

シャンティな人たち

शान्ति

vol. 61

小西純寛 こにし すみひろ

千手観音
店主

1000の手をつなぎあわせたい

――「SVAクラフト・エイド」の製品を2年前から扱ってくださっているフェアトレード雑貨のお店「千手観音」さん。東京メトロ丸の内線、南阿佐ヶ谷駅近くのお店にうかがいました。

「以前からフェアトレードの店に行って小物を購入したり、興味をもっていた。途上国は貧困から抜け出せない現状があり、フェアトレードは解決のひとつの手段になるのではと考え、ここでお店をオープンさせた。あまり浸透していないフェアトレードだが、どの町にもフェアトレードの店があってもいいと思う」

現在、8団体と地域の作業所から仕入れており、商品の選定と仕入、値札作成、店の運営を、年中無休で一人でこなしている。お客さんは50～60代の女性が多く、暖かい時期は店のドアを開けて営業しているので、通りから高校生の「なんのお店だろう」と言っている声が聞こえたり、「前から気になっていた」と入って来られる方もいる。

こんな物も、あんな物もあると商品を選んで欲しいので、品揃えはまず豊富でにぎやかにしたいと思っている。売れないなあと思っても置いておくと、探していたものが見つかったという人がいるかもしれない。

「SVAクラフト・エイド」のことは送られてきたカタログを見て知った。伝統的なモチーフや楽しい図形の魅力のある商品がいくつかあり、価格も高くないところに他団体との違いを感じている。〝ラオスの森ポーチ〟は人気で、可愛いからとプレゼントされる方も。詩人の谷川俊太郎さんも、この店でラオスの森ポーチを購入して下さったひとり。雑誌「ケトル」（太田出版）2012年4月号に紹介されている。

「千手観音」という珍しい名前の由来は、美術展でチベットの千手観音を見たことから。1m20cmもあり、一生懸命作ってあって荘厳さと親近感を同時に感じた。顔も手も足もたくさんある千手観音に万能感を持った。自分が忘れていた人間らしいことを思い出させてくれる。

千手観音がフェアトレードの商品を持っていて、お客さんに豊かな心を差し上げましょうというイメージで名づけた。フェアトレード商品を手に取ることで生活が豊かになり、この店でクラフトを作る人と使う人の1000の手と手をつなぎ合わせたいと思っている。

（国内事業課長　神崎愛子）

フェアトレード雑貨のお店
千手観音
東京都杉並区成田東 5-42-13
電話 03-3393-0294
定休日：月曜日
営業時間：11:00 ～ 19:30

これがワタシのチカラになる！

スタッフの昼ごはん

この食堂はスタッフに人気、安くておいしいので私も月に数回来ます。ふだんは事務所の台所で、経理スタッフや掃除婦さんとランチを食べることが多いです。カンボジア料理の基本はご飯とスープ。私はスープが大好きです。カンボジア事務所で経理課に勤めて20年以上になります。事業地に行くことはめったにありませんが、領収書に書かれた場所や使途を読んで、子どもたちの姿を想像しています。私たちの事業が、カンボジアの文化保護を担っていると実感します。（ライム談）

ឆ្ងាញ់ណាស់ チガン・ナ（とてもおいしいよ～）

SVA国内外での主な活動

2012年12月～2013年3月

	東京	東北（岩手・山元・気仙沼）	海外
12月	**1日** 理事会／**15日** 「シャンティとしょかん」ラオスのおはなし／**20日** 東京にて東日本大震災復興支援事業合同会議	**10日** 岩手事務所にて「走れ東北！移動図書館プロジェクト」リーダー会議／**13日** 気仙沼の前浜コミュニティセンター地鎮祭	
1月	**17日** 理事会／**30日** 東京事務所前年度評価会議	**19～20日** 岩手で写真教室／**20日** 気仙沼マイワカメプロジェクト「ワカメの成長見学会」	**8～26日** 絵本作家やべみつのりさん絵本出版研修 カンボジア事務所・ラオス事務所・ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ事務所／**28日～2月23日** ミャンマーにて事業形成調査／アフガニスタンで出版絵本が完成
2月	**5日** 「シャンティとしょかん」カンボジアのおはなし／**14日** 業務執行理事会／**23日** 「こどもえほんをとどけるうんどう」	**17日** 気仙沼マイワカメプロジェクト「ワカメの刈り取り会」／**27日** 東京で気仙沼産ワカメを「求評見本市」に出展	**2月下旬～4月** カンボジア、ラオス、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ事務所で「NGO海外研修プログラム」
3月	**1日** 理事会／**2日** 「シャンティとしょかん」アフガニスタンのおはなし／**23日** 講演会「最強の現場創りから、被災地支援へ」、総会		**上旬** カンボジアにて海外事務所合同経理研修

美容師の菅原司郎さんにお話しいただいた「シャンティとしょかん」カンボジアのおはなし

「気仙沼マイワカメプロジェクト」ではワカメを育てる体験に全国から参加者が訪れた

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ他3事務所で、やべみつのりさん（中央の男性）の研修会

日本しゃんてい旅

2 埼玉県・飯能市 能仁寺（のうにんじ）

埼玉県の名勝天覧山（てんらんざん）。登りやすく景色が良いので、近郊の小学生が遠足で訪れるなど、多くの人に親しまれている景勝地です。体力に応じて楽しめるハイキングコースが山づたいに整備されて、シーズンになると登山や散歩の人で賑わっています。

そんな天覧山のふもとにある能仁寺は、室町時代から続く名刹。桃山時代に作庭されたと伝わる庭園は「日本名園百選」に選ばれており、紅葉の季節は美景を目当てに多くの参拝客が訪れます。また毎年11月下旬に催される「チャリティライブ」では募金をSVAへ寄付くださるなど、「国際ボランティアの寺」としてご協力いただいています。

境内では彫刻や版画などの美術作品が随所に見られる楽しみもあり、珍しいところでは、画家・絹谷幸二さんと読売ジャイアンツの長嶋終身名誉監督が合作された版画などの作品も見られます。

4月下旬は天覧山のツツジが見頃。近くを流れる名栗川のほとりには会席料理店もあり、川を望んでゆっくり食事が楽しめます。首都圏から1時間、日帰りで何度も訪れたいところです。

■広報課　清野陽子

◉能仁寺庭園
埼玉県飯能市飯能 1329
☎042-973-4128
拝観料　300円
拝観時間　9:00～16:00

◉周辺の見どころ
天覧山（山頂まで徒歩10分）
名栗川（飯能河原まで徒歩15分）

◉アクセス
西武池袋線「飯能駅」下車（徒歩20分またはタクシー5分）。飯能駅北口からバスで「天覧山下」バス停下車（徒歩5分）

SVAからのお知らせ

2013年4月～7月

スタディーツアーを準備中です

今年の11月、僧侶対象のカンボジアスタディツアー、タイのミャンマー（ビルマ）難民キャンプを訪ねるスタディーツアーを企画しています。

夏号に詳細をお知らせいたします。みなさんのご参加をお待ちしております。（国内事業課　神崎愛子）

人事のお知らせ

●入職

長沢有華……緊急救援担当契約スタッフ（2月18日付）

●契約形態の変更

竹谷麻莉子……カンボジア事務所NGOジュニアプログラムオフィサーから、ラオス事務所契約スタッフへ（2月1日付）

菊池礼乃……ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所NGOジュニアプログラムオフィサーから、契約スタッフへ（3月26日付）

●退職

仁井勇佑……ラオス事務所NGOジュニアプログラムオフィサー（2月17日付）

岩佐貴美子……山元事務所事務局担当契約スタッフ（2月28日付）

髙野竜也……山元事務所図書館活動プログラム担当契約スタッフ（3月5日付）

●異動

野口早苗……国内事業課「会員／アジアの図書館サポーター」担当から「絵本を届ける運動」担当へ（3月1日付）

平島容子……国内事業課「絵本を届ける運動」担当から「会員/アジアの図書館サポーター」担当へ（3月1日付）

仏教NGOネットワーク（BNN）から「寺院備災ガイドブック」が発行!

東日本大震災の被災地では多くの寺に住民が避難してきました。いざというときに備える寺院向けのガイドブックが4月1日に発行されました。この編集にはSVAも中心的な役割を担っています。

内容は、「備災寺族会議チェック一覧」、「様々な災害に備える」、「災害時医療マニュアル」、「寺院の避難所運営マニュアル」「東日本大震災で避難所となった寺院の教訓集」、「備品・備蓄チェックリスト」などです。

A4判60ページ　頒布額＝1冊500円（送料込）ご希望の方は「仏教NGOネットワーク（BNN）」のホームページ（http://www.bnn.ne.jp/）よりお申し込みください。

編集後記

朝日新聞で、子ども時代に多読した人は、「自分のことが好き」「なんでも最後までやり遂げたい」「生活に満足している」といった前向きな意識を持つ傾向が強かったという調査結果（国立青少年教育振興機構）を読みました。

幼少時、忙しい中でも寝る前に本を読み聞かせてくれた母に感謝の念を新たにしました。本を読むことが好きになり、毎月本が届くのが楽しみだったことも思い出します。

読書の習慣は、大人から子どもへのなによりの贈りものになるのではないでしょうか。（清野陽子）

◎表紙の絵本『おひさまいろのきもの』広野多珂子作・絵（福音館書店）

シャンティ　2013年春 269号
2013年4月1日発行
発行人　若林恭英
発行所　公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233　FAX 03-5360-1220
WEB：http://www.sva.or.jp　E-Mail：info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724
編集人　関尚士
装丁・レイアウト　矢萩多聞／イラスト　清原笑子
印刷　株式会社大川印刷　定価550円

©2013. Shanti Volunteer Association. All Rights Reserved. Printed in Japan.

●当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C009309
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

道

巻末言

石井桃子『子どもの図書館』。
大学卒業まぎわに
この本に出会ってしまった。
読み終えて即、
私は児童図書館員になるんだ!
と思った。

子どもと本と図書館

SVA専門アドバイザー　佐藤凉子

私を〝子どもと本と図書館〟という仕事に出会わせてくれたのは、『子どもの図書館』（石井桃子著・岩波新書）という一冊の本だった。

1940年代、北海道小都市で生まれ育った私にとって、女性が専門性を磨きながら働きつづけられる場の選択肢は、きわめて限られていた。大学を卒業したら教師になろうと決めていた。大学4年の時に、教師ではなかったが国家公務員として働ける職場も決まった。お金を貯めて改めて教師を目指すことも出来ると思った。

ところが、卒業まぎわにこの本に出会ってしまった。本は人並み以上に好きな人間だったが、伝記の類はあまり好きではなかった。読み終えて即、私は児童図書館員になるんだ！と思ってしまった自分自身に、我ながら驚いた。

当時の心の有り様はもはやかすみの彼方であるが、こんなに魅力的な仕事があったのかと知ったときの、どきどきというより唖然とした気持ちはいまも思い出す。この年になって推測するに、戦後の民主的な教育（北海道ではその気風が強かったと思う）と、〝子どもと本と図書館〟が、もしかしたら心の深いところでつながったのかも知れない。そうでなければ〝子どもと本〟だけで満足し得たかも知れない。

〝子どもと本と図書館〟が、未来の礎であるという思いはそれからもずっと色褪せず、現在も私の行動の中軸となっている。もちろん図書館の仕事はもっと多様で、すべての人びとに対して誠実に行われるべきものであるが、図書館員としての核心を支えてきたのは、まさにその言葉であった。

〝子どもと本と図書館〟の魅力を知ってしまった沢山の仲間たちに、だからこそ困難に対してめげない仲間たちに送るエールとして、読んでもらえると嬉しい。

（神奈川県・子どもと読書のコーディネーター&ストーリーテラー）